

シノ釘三百六十本、代輪附鉸三百六十本、西ノ鳥居ヨリ東鳥居迄五十二間二尺ト載ス、今詳ニスルニ永享六年普廣院將軍始テ架ラルノ言ニ據テ、寛正記享徳元年修補ヲ僧徒ニ託スルノ説ヲ閱ルニ、永享六年ヨリ享徳元年ニ至リ、稍ク十八年ヲ歴タリ、然ルニ修補ヲ加フベキニイタリ、其業不遂ニ至リ、六七年ヲ歴テ長祿二年、十穀法師架シテ、万部法華經供養ス由、物忌年代記ニ載セ、又寛正六年、同十穀法師架スルトモ云、長祿二年ヨリ寛正六年ニイタリ、九年ヲ歴タリ、是纔ノ年紀ニシテ朽損スベキナシ、異記トスベシ、又永正二年慶光院第二世守悦上人本願トシテ架ス、寛正六ヨリ四十一年ノ後ニシテ其廢絶スルニ至、又天文十四年、尼本願ト載ルトキハ、或云同第三世清順上人ナルベシ、永正二年ヨリ天文十四年ニ至リ、又四十一一年ヲ歴テ修架ニ至レリ、其後天正八年、同十九年、慶長十一年、元和、寛永十九年、正徳五年、其餘近世連綿シテ官營也、澆季トイヘドモ、足利將軍ヨリ僧徒ノ修造ヲ受テ、織田、豊臣ノ二公ノ嗣テ營セラルニ及テ、今昇平ノ經營ニ及テ存スル處ハ、嘉賞スベキト云ベシ、

〔大神宮參詣記〕康永元年十月十日あまりの頃、太神宮參詣○中五十鈴川は大宮と風の宮とのたにあひより流れて、深山木のこだかき陰におちくる水の音、まことに心ほそし、○中瀧祭の神とて、河の洲崎、松杉などの、一むらたてるばかりにて、御社もまします、○中きたを望ば長橋のながれをきるあり、緑松たれて行人の道をさへ、南を顧みれば高巖なみをくだくあり、紅葉のこりて遊客の心をそむ、所にふれて感をうごかし、ものごとくに興をもよほさずと云ふ事なし、

〔神廷紀年五後花園〕長祿二年、此年宇治大橋成、

〔河崎氏年代記〕文明九丁西、内宮大橋斷

〔翰林胡蘆集六〕丁未○長五月、有事太神宮、自二十六日出洛、至二十九日入伊、而宿於横地館、六

月五日○中賦、内、外宮、宇治橋者三篇、○中書以贈館主大夫云、○中